

インドにおける女子教育及び女性のライフコース（第2報） —デリー及びボパールでの調査（2007）より—

“Women's Education and Life Courses in India (2): A Field Work Project in Delhi and Bhopal in 2007”

服部 範子* 名須川 知子** 黒川 衣代***
HATTORI Noriko NASUKAWA Tomoko KUROKAWA Kinuyo
加納 光子**** 岩崎 雅美*****
KANOH Mitsuko IWASAKI Masami

本稿は、南アジアにおける女性の生活状況や女性のライフコースに着目し、女性のエンパワーメントをさらに促進させる方途を探ることを目的とする調査研究の一部である。インドでの現地調査は、2007年8月24日～9月2日の期間に、インドの首都デリー（Delhi）とデリーの南に位置するマディヤ・プラデーシュ（Madhya Pradesh）州の州都ボパール（Bhopal）で実施した。本稿では以下の3点について論じる。

第一はインドの就学前教育についてである。モンテッソーリの影響が見られることや、幼児教育総合プログラムが普及していることを論じる。

第二は、インドにおける最近のコンピューター・ITの発達は、女性の教育や職業進出を促進していることを論じる。

第三にインドの人口や教育状況についてみると、調査地が含まれる北インドは南インドよりも劣りジェンダー差がみられることを論じる。

キーワード：女性，インド，教育，IT，人口

Key words：woman, India, education, IT, population

1. 問題の所在・研究方法など

南アジアは世界的にみて人口、健康、貧困、教育などの諸側面において課題の多い地域とみなされている。また、ジェンダー不平等の際立った地域であるが、1990年代に入ると、リプロダクティブ・ヘルス（reproductive health）やエンパワーメントの重要性が認識され、女性関連施策が急激に推進され始めている。この地域における世界的な支援が最近、活発化しているため、識字率や就学率、子どもの死亡率や妊娠・出産などのデータが、急激に改善してきている。しかし、世界的にみれば、依然として深刻な生活状況にある地域である。

本研究の目的は、南アジアにおける女性の生活状況や女性のライフコースに着目し、広義に女性のエンパワーメントを促進する社会的な諸制度、諸施策などが、女性のエンパワーメントを、どのように、どの程度、促進させているか、あるいは、どのような要因が阻害要因になっているのかを明らかにすることである。

本稿は以上のような調査研究の一部を報告するもので

ある。現地調査は2007年8月24日～9月2日の期間に、インドの首都デリー（Delhi）とデリーの南に位置するマディヤ・プラデーシュ（Madhya Pradesh）州の州都ボパール（Bhopal）で実施した。インドでは最近のジェンダー問題への取組み状況や女子教育の現状について、関係機関を訪問し、情報・資料の収集及び関係者と情報交換した。

現地調査には服部・岩崎・加納・黒川・名須川の5名が参加し、本研究は参加した全メンバーによる共同研究である。本調査結果のうち、最近の女性の教育と職業に関する動向、社会福祉の現状及び伝統的服装については、前巻で報告した。それに続き本稿では、インドの就学前教育（名須川）、女性教育とコンピューター・ITとの関連性（黒川）及び人口問題とジェンダー（服部）という3テーマについて論じる。

*兵庫教育大学（社会・言語教育学系） **兵庫教育大学（基礎教育学系） ***鳴門教育大学

****武庫川女子大学 *****奈良女子大学

平成20年4月18日受理

2. インドの就学前教育

1) はじめに

インドの就学前教育機関は、インド独立前から私立的学校として設立されていた。1947年の独立後、インドの就学前教育は、その経緯から、初等教育としての方策と、福祉政策として2方向で展開しているが、現在もそれらの境界は明確なものとなっていない⁽¹⁾。また、政府は部分的に20%ほどの財政支援をしているほかは、財源は全体的に私的財団に依存するか、そのほとんどをボランティア的な財政に依存しているのが現状である。それは、義務教育である小学校の就学率も2005年の段階で100%になっていないことや、就学率には男女差があり、就学前教育まで十分配慮されないことが伺われよう。しかし、幼児期に就学前施設へ関与することは義務教育の就学率を高め、インドの学校で多いとされている原級留置や中途退学の予防としても意味のあることとされている⁽²⁾。

ここでは、インドの就学前教育の現状について概要を述べる。また、2007年8月24日から9月2日までの期間にインドの首都デリーとその南に位置するマディア・プラデシュ州の州都ボパールにおいて、主に初等学校を訪問する機会を得た⁽³⁾。そこでの就学前教育施設の訪問について報告する。

2) 就学前教育機関の状況

インドの就学前教育機関としては、多種多様な施設が現存する。それは、(1) 西欧をモデルとする幼稚園、保育学校、モンテッソーリ・スクールや、(2) インド独自の就学前教育機関である、プレ・ベーシック・スクールの他、(3) 保健衛生と教育計画や福祉計画の一環として、パールワディ、アンガンワディ等、さらに(4) 保育所・託児所としてのデイ・ケア・センター、クレシェ等がある。

(1) 幼稚園、保育学校、モンテッソーリ・スクール

本来、インドにおける幼い子どもは、伝統的な大家族制度のもと、多くの大人の庇護の下で生活していた。大家族制とは、父祖が同じ男系世代の夫婦が同居し、田畑等の財産を共有し、共同の生活を行うもので、さまざまな年齢の子どもが同居し、多くの大人がいた⁽⁴⁾。ここでは、幼い子どもを家庭外に預ける必要はなかったのである。しかし、それでも、20世紀はじめから就学前教育施設は存在していた。それは、イギリス統治権力による近代学校制度の影響の下、上流階級の子弟を対象としたドイツのフレーベル幼稚園やイギリスのマーガレット・マクミランの保育学校、イタリアのモンテッソーリ・スクール等、ヨーロッパから輸入された幼稚園である。中でも、モンテッソーリ・スクールについては、モンテッソーリの1939～1949年までの10年にわたるインドでの滞

在やその間のガンディーとの親交もあり、インドにおける就学前教育への影響は大きかったと考えられる⁽⁵⁾。

(2) プレ・ベーシック・スクール

独立後のインド独特の初等教育の形態であり、ガンディーのプレ・ベーシック・スクールとして普及がされた。7歳になるまでの幼児に対する教育を指す。この教育は、初等教育のベーシック・エデュケーションの準備を目的としている⁽⁶⁾。

ガンディーは、就学前教育をⅠ 出生前の胎児期(妊婦への成人教育)、Ⅱ 出生より2歳半まで(母親に対する幼児の保護と健康の増進)、Ⅲ 2歳半から4歳まで(年少時を対象としたジュニア段階)、Ⅳ 4歳から7歳まで(年長児を対象としたシニア段階)の4段階の教育を考えていた。なかでもモンテッソーリとの共有点では、Ⅲのジュニア段階の、「自由な活動を通じての身の回りの環境との接触により、幼児の諸能力を発達させることを基本としている。」⁽⁷⁾ことを述べている。これは、モンテッソーリの実物教育や遊びを通じた教育という点で共通性があり、ガンディー自身「この教育方法が学習に負担を感じさせず、あたかも遊んでいるかのごとき学ばせていること、子どもの全器官すなわち手、鼻、耳、舌、膚、心の全面発達を目指していること、(中略)自主的学習が尊重されていること、沈黙と集中が守られていること等について感銘を受けている」とされている⁽⁸⁾。さらに、Ⅳのシニア段階では、「さまざまな仕事を体験させることによって、幼児に労働に対する興味を抱かせ、労働の尊厳を認識させ、精神労働と肉体労働の間に存在する偏見を除去することである。」⁽⁹⁾として、労働に対する好ましい態度の育成、責任感と自立心の認識が実現されている。

(3) パールワディ、アンガンワディ

一方、インドでは、現在1世帯当たりの平均成員数は5.1人とされているように、大都市を中心に急激な核家族化現象が起きている⁽¹⁰⁾。すなわち、都市中産階級の間で共働きの家庭が増えてきており、就学前教育をめぐる状況が大きく変化してきている。このような幼児をとりまく環境の変化により、保護及び教育の機能の低下が起きている。このような要請に応える施設として、パールワディがある。それは、もともと「子どもの園」の意味であり、就学前教育全般をいうこともある。これは、1961年からの第三次五カ年計画におけるものであり、1973年には13,500の施設で65万人の農村地域、スラム幼児を対象としていた。経費は中央政府から支出され、社会福祉局から配分される。地方自治体も一部を負担し、中には私的団体によるものもある。施設の大部分は無償であり、「このパールワディこそが現在のインドの中心

的な就学前教育施設⁽¹¹⁾と言われ、1週間に6日間預かり、2歳半から6歳の幼児を25～50人収容している。その設置形態は乳幼児保健センター、社会福祉センター、初等学校、寺院に併設されており、カリキュラムや教育方法は教師の裁量によるもので多種多様である⁽¹²⁾。

1990年代の教育行政は、政府によって邦・州・地区の3レベルで実施され、初等教育は連邦政府が管轄し、女性・子ども開発局がある。1986年には、インド政府がNPE-86（National Policy on Education）を人材開発のための重要な戦略として採用している。そこには、幼児の養育と教育（Early Childhood Care and Education=ECCE）について示されている。そこでは、幼児の遊びと自立が強調されている。さらに、3R'sについての公的な方法と紹介もされている。そのために教師のトレーニングも強調されている⁽¹³⁾。1980年代以降、政府は母親と乳幼児を対象とした総合的な福祉プログラム（Integrated Child Development Strategy；ICDS）を開発し、各コミュニティに「アンガンワディ・センター」（Anganwadi centre）という保育所と幼稚園をあわせたような施設で、特別にトレーニングを受けたアンガンワディワーカーによって教育されている。そこでは、出産前の母親に対しても教育が実施されている⁽¹⁴⁾。現在は、このICDSと言われる「幼児教育統合プログラム」が各地の機関に採用され、現在最も普及されている。その内容は、保育と基礎的な読・書・算も実施されている⁽¹⁵⁾。この施設は最も普及している就学前教育機関ではある。1992年の報告によると、幼稚園の教師は数少ない教材で教えているが、大変バイタリティにあふれており、幼い子どもも含めて歌やゲームもしている。そこでは、子どもたちに手をしっかり洗うこと等、衛生面においても非常に細やかな指導を行っている⁽¹⁶⁾。

(4) クレシエ

託児所の意味であり、母親が就労している2歳半未満



写真1 国旗で歓迎してくれる幼稚園児（デリー 2007）

の乳幼児を預かる施設であるが、明確な年齢幅があるわけでもない。おもに大・中都市に設置されている。一般に労働局・社会福祉局の管轄であるが、私的団体へ補助金を出して実施している場合もある。保育内容は、「身体や手を洗うという衛生管理と、ミルクや食事を与えるという栄養補給、及び母親の代わりとしての子どもの世話が中心とされている。」⁽¹⁷⁾しかし、現在急激に増加している、都市における女性の労働力の維持や発展への役割を担っている。

3) 就学前教育施設の現在

2007年8月24日から9月2日までの期間にインドの首都デリーとその南に位置するマディア・プラデシュ州の州都ボパールを学校訪問した。そこでの就学前学校について述べる。

(1) 幼稚園（デリー）

デリーの私立学校ロックウッド・スクール（Rockwood School）では、3歳半から18歳までの教育をしている（写真1）。全生徒数は800人くらいで、40名の教師がいる。ここの幼稚園での子どもたちが、インドと日本の国旗をもって歓迎してくれた。子どもたちは、制服であり、靴・靴下まで決められている。名札は首からかけており、教師はサリーを着用している。保育内容は明確ではないが、国旗の作成は、モンテッソーリ教育の影響が加味されていると考えられる。裕福な家庭の子弟であることが伺われる。

(2) 幼稚園（ボパール）

この幼稚園は、ボパールのピラボング・ハイスクール（Billabong High）の1階の1教室としてある。廊下に沿って、明るい室内に美しい窓が設置されている。

写真2の部屋の中は、広い空間で、カラフルな色の机、椅子、ごっこ遊びの際の大がかりなセットがされている。



写真2 保育室内。左手はごっこ遊びのセット（ボパール 2007）

全体的にピンク色を多く使用している。

内側は部屋のように、左側に台所と右側にベッドがありその壁は夜の様子をあらわしている。ごっこ遊びの環境であるが、ここでもピンク色が基調となっている。室内の配色や、道具のセッティングから考えると、モンテッソーリ教育の影響を見ることができる。

壁面には、蜂になぞらえて顔写真と氏名、生年月日が記された誕生日表がある。クラスの人数は21名である。文字は英語である。幼稚園から英語教育を実施している。インドの私立幼稚園は、その後の就学のこともあり、英語で教育するのが一般的である。

(3) クレシェ (デリー)

幼稚園はいずれも私立学校の付設であったが、デリーで単独のクレシェを見学することができた。託児所というより、わが国における民間保育所のようなものであろう。ここでは、2歳から4歳までの15人の子どもを預かっており、3人の教師で担当している。食事、睡眠の他、幼児教育も実施している。なお、5歳になるとプレ・スクールに行くそうである。この施設は政府からの補助金は受けず、独自で実施している。その理由として、補助金を受けると様々な制約があるから、ということであった。

在園児の家庭の所得は様々であり、両親の相談にも多く応じている。やはり、最近の急激な家族体制の変化により、最近のニューファミリーと言われる世代は両親二人に子どもが一人か二人であり、問題も多くあり、中には離婚問題についても相談になることもあるということであった。

保育内容は、活動の他、ものとの関わり、果物や野菜の名前や形といったことを、ゆっくりとすこしずつ学べるように環境や教材を工夫しているとのことであった。また、保育の内容についても保護者に十分説明をするよ



写真3 SACRED HEART MOTESSORI CRECHEの看板
(デリー 2007)

う心がけているとのことであった。

写真3は、SACRED HEART MOTESSORI CRECHEの赤い看板が中央の青い看板と右上の赤い看板に見られるが、Sacredとは、インドの聖牛をあらわす場合や、転じて神聖という意味にも用いられる。また、ここではモンテッソーリの名前が明確に記されており、モンテッソーリ教育に基づいた保育所である。左の絵は、インドの神話に基づくものである。

写真4は、室内の様子であるが、カラフルな色の教材が多く見られる。人形の他に、テーブルの上には知育教材、右上の壁には文字教材、左側の壁には物の名前が記されている。文字は、英語である。



写真4 室内の教材の様子 (デリー 2007)

4) おわりに

インドの就学前教育は、多種多様な形で実施されており、中にはその歴史の古いものもある。しかし、独立後ガンディーが構想したベーシック・エデュケーションの就学前版とも言うべきプレ・ベーシック・エデュケーションの基底にモンテッソーリが強く影響したことは、現在のインドの就学前教育にとっては幸運な事であったと言える。その理由は、幼児期の子どもにとって、遊びを中心とした内容が考慮されていること、また、環境の中で学ぶという幼児教育にとっての基本が前提となっているからである。確かに、英語や知育的な教材はあるが、それを幼児の心身の発達に応じて無理なく活用されている様子を見ることができるからである。

今回の調査は、主に小学校以上の学校が中心であったが、ここでは、公私立学校問わず、英語とIT教育に重点をおいているのを見た。どんなに貧しい校舎であっても、りっぱなコンピューターが2人の生徒に1台の割合でそろい、さらにそこでの学習の様子を見学したところ、教材ソフトがかなり充実していることがわかった。生徒たちの使っているソフトは教師とコンピューター会社と共同開発したものであると聞いた。このような教育学習環

境は、これからのインド社会を担っていく人材を養成するために英語とITと理数系を充実させているという教育方針を感じた。このような就学に関する考えを前提とした場合、就学前の教育としてはともすればそのための準備としての教育という考え方が主流になっても当然であろう。しかしながら、今回の調査の結果からは、まず「遊び」を大切にしたい学びのある環境が明確になっている。もちろん、1960年代頃は、特にクレシェと言われる託児的などころは、栄養補給と衛生管理が主であったと記載されているが、今回は私的財政であっても、モンテッソーリの思想を基にその地域で可能な保育が提供されていた。また、私立学校附属幼稚園に関しても、早期知的教育に走ることなく、十分に遊びの環境の整った様子を垣間見ることができた。この就学前教育に関する基本的な考え方は、幼児教育として健全なものとして、これからのインドにおける幼児教育として発展していくことであろう。

ただし、課題も山積している。まず、就学前教育機関への就園率である。1986年の普及目標でさえ、3～5歳児は、5%、5歳児については50%であるという記述がある⁽¹⁸⁾。まず就学率100%を目指していることから考えても、就園率まで行き届かないのはやむを得ないことであろう。さらに財政的に私学に依存していることも課題である。現在、経済的に目覚ましい発展を遂げているインドにおいて、その豊かさが教育へ注がれるようになることを期待してやまない。

注

- (1) 渋谷英章「VII インド」阿部洋監修『世界の幼児教育1 アジア』日本らいぶらり p.384, 1983.
- (2) 同上 p.359
- (3) 服部範子他「インドにおける女子教育及び女性のライフコース－デリー及びボパールでの調査（2007）より－」『兵庫教育大学研究紀要』第32巻 pp.53～65
- (4) 福永正明「家族・親族」辛島昇他監修『南インドを知る事典』平凡社 p.143, 2006.
- (5) 前掲書 (1) p.369
- (6) 同上 p.371
- (7) 同上 p.372
- (8) ガンディー、タゴール「万物帰一の教育」弘中和彦著訳『世界新教育運動選書30』明治図書 p.34, 1990.
- (9) 前掲書 (1) p.372
- (10) 前掲書 (4) p.143
- (11) 前掲書 (1) p.374
- (12) 同上
- (13) R.Muralidharan "Training of Personnel for

Programmers in Early Childhood Care and Education in India" International Journal of Early Childhood 24(2) pp.35-40 1992.

- (14) http://www.jasso.go.jp/study_a/documents/india2.pdf 2008/03/04
- (15) http://www.sagami-wu.ac.jp/kmatsu/India_profile_03.htm 2008/03/04
- (16) Shirley French "A Study Tour to India" International Journal of Early Childhood 24(1) pp.68-72 1992.
- (17) 前掲書 (1) p.382
- (18) 前掲書 (1) p.384

(名須川 知子)

3. インドの女性とコンピューター・IT －将来の夢と専攻分野をてがかりに－

1) はじめに

インドの女性は往々にして「父権制度」「男性支配」「女性蔑視」「女性差別」「資産分配の不公平」「二級市民」等の言葉で記述される⁽¹⁾、エンジニアリング業界のサーマックス社の会長で、2006年11月に大阪で開催されたアジア女性経済人会議での発表者メーハー・パダムジーさんによれば「女性は幼いころから忠実な妻、従順な嫁、自己犠牲的な母親になることが宿命であると叩き込まれる」⁽²⁾ という。自分の人生を自分で決める機会も自由もなく、男性への忍従を強いられる一生であり、どこか日本の「家」制度時代の女性を思い起こさせる。従って、一般的に自尊感情レベルは低いと報告されている⁽³⁾。このような概要的な説明は決して間違いではないのであろうが、私達がインドで出会い、直接話を聞くことができた女性たちから受けた印象は異なっていた。彼女たちは一様に自分の仕事に誇りを持ち、自信に満ちていた。上流階級に属すると思われる彼女たちの活躍は、既に報告されたとおりである⁽⁴⁾。

本稿では、次世代を担う子どもたちが将来につきたい職業や若者の高等教育機関での専攻を手がかりに日本と比較し、コンピューターやITと女子および女性のエンパワメントとの関連について論じる。

2) 子どもたちの将来の職業の希望

(1) 公立小学校の児童

マディヤプラデシュ州都のボパールでは2つの公立小中学校を訪問した。そのうちのひとつ、カミラ小中学校の教室は、節電のためであろうか少々暗かったが、学校に来ている子どもたちの表情は明るく、希望に満ちた表情をしていた。月並みではあるが、目が輝いていた。そこの5学年のクラスで「将来、何になりたいか」をた

ずねた。この日は地域の祭りのために欠席が多く、出席は男女合わせて13名(写真5)であったが、「医者」「警察官」「パイロット」「弁護士」「コンピューターエンジニア」「教師」といった答えが返ってきた。その返答には迷いがなく明確で、しかも素早い回答であったことと女子に教師希望がやや多いものの、特に男女の差がなかったのが印象的であった。

日本であれば、おそらくこのくらいの年齢の子どもは、分からないと答えるか、あるいははっきりとした職業を挙げられない子どもが結構いるのではないと思われる。ベネッセ教育研究開発センターが、日本の小学5年生を対象に2006年に実施した調査(サンプル数は男子1,397名、女子1,310名)によると、将来につきたい職業は回答が多かった順に、男子が「野球選手」(15.7%)、「サッカー選手」(10.2%)、「サラリーマン」(4.3%)、女子は「保育士・幼稚園の先生」(9.3%)、「ケーキ屋さん・パティシエ」(8.5%)、「看護師」(4.3%)である。また、「未定」「なし」「無記入」を合わせる不確定者は、男子では16.3%、女子では10.3%を占めていた⁽⁵⁾。

では、カミラ小中学校5年生の子どもたちが答えた職業は、日本の子どもたちがどの程度つきたい職業なのだろうか。同調査が20位まで発表している「将来つきたい職業のランキング」を見ると、男子では「医師」が4位(4.2%)、「学校の先生」は13位(1.1%)、「警察官」は15位(1.0%)となっている。女子のランキングでは「学校の先生」が6位(3.7%)、「医師」は7位(3.5%)、そして「法律家(弁護士・裁判官・検察官)」が20位(1.1%)である。「パイロット」と「コンピューターエンジニア」は入っていなかった。

インドと日本では将来つきたい職業の上位が異なることに加えて、日本では男女によりつきたい職業が大きく違う。インドでは男女差があまり無いことは注目に値する。また、日本では無回答の多さから、将来を具体的に描けない子どもが少なからずいることが明らかである。



写真5 公立学校の5年生(ポパール 2007)

(2) 私立学校の女子生徒

デリーの私立学校、ロックウッド・スクール(Rockwood School)では、10~12学年(15歳~17歳)の女子生徒たち5人に将来に希望する職業についてたずねた。コンピューターエンジニアが1人、ソフトウェアエンジニアが2人、会計士が1人、経理会社への就職希望が1人であった。全員、兄か弟かの異性のきょうだいがいることから、「家庭の中で女の子だから・・・と親に言われることはないのか」聞いてみたところ、異口同音に「そんなことはない、機会は平等にしてくれる」という答えだった。「今はむしろ逆で、女の子だからこそ力を入れてくれる」という生徒もいた。

一方、日本の高校生はどうであろうか。ベネッセ教育研究開発センターが2006年に高校2年生を対象に実施した調査(サンプル数は男子2,168名、女子2,269名)によると、女子高校生が将来に希望する職業の上位3つは回答が多い順に「学校の先生」(8.2%)、「保育士・幼稚園の先生」(6.2%)、「看護師」(5.6%)である。20位までにコンピューター関係の技術者、会計士は入っていない。ちなみに男子高校生の希望する職業をみると「技術者・エンジニア・整備士」が8位(1.6%)、「コンピュータープログラマー・システムエンジニア」は9位(1.6%)であり、「公認会計士・税理士」(0.8%)は17位に登場する⁽⁶⁾。

ロックウッド・スクールは比較的裕福な家庭の子どもが通う私立学校であることから、単純な比較は気をつけなければならないが、インドの女子生徒が希望する職業は、日本においては多分に男子の希望する職業であり、女子は望んでいないことが分かる。このように日本では職業志向において、小学校に引き続き男女差が明白である。高校生は女性向きの職業、男性向きの職業という枠組みで職業を捉えていると考えられる。

いつの時代においても、子どもたちが憧れる職業は、現実の社会での認識受容度や注目度と関係があることを考えると、情報技術(IT)産業の発展がロックウッド・スクールの女子生徒の思い描く進路に影響を与えていると推察される。情報通信技術の進展度から言えば、日本においてもインドと同じように女子生徒の口から「コンピューター関連のエンジニアになりたい」という将来の希望が聞かれても不思議はないのに、そうではないのはなぜなのであろうか。日本において幼少時から職業を性別で分けて捉えさせている要因と、そのような考えを堅持させているメカニズムを解明する必要がある。

3) 大学生の専攻分野

次に、年齢がもう少しあがった青年期の若者を見てみよう。

私たちが訪問したのはポパールにあるオールセイント

工科大学（All Saints' College of Technology）（写真6）である。工科大学といえば、日本では教員も学生も圧倒的に男性が多いというイメージがあるが、オールセント工科大学は違っていた。この大学の設立者（写真7）も案内をして下さった副学長も、そして会うことはできなかったが学園長も女性であった。女性教員は40%を占め、女子学生も全学生の40%であるという。女性の割合の多さに、正直驚かされた。残念ながら、ここの学生に将来の職業をたずねる機会がなかったが、工科大学であるので職業志向はおのずと想像できる。そこで、インド全体の高等教育機関での専攻に注目したい。

インドの高等教育機関において、もともと昔から女子学生が多かったわけではない。独立前は、全学生数に占める女子学生数の割合は10%にも満たなかったが、独立後、特に1980年代以降、高等教育機関に在籍する女子学生数が著しく増加したのである⁽⁷⁾。その結果、2001-2002年では女子学生数の割合は39.84%になっている。男子学生数100に対して、女子学生数は1950-1951年では14であったが、2001-2002年には66にまで増加している。

女子学生の専攻分野を1998-1999年のデータで見ると、



写真6 オールセント工科大学（ボパール 2007）



写真7 工科大学設立者の肖像画（ボパール 2007）

人文（Arts）は男子学生100に対して80.1と多の専攻分野に比べると一番多い。医学（Medicine）では62.1、自然科学（Science）では55.3と半数を超えており、商学（Commerce）においても46.1と半数に近い。一番少ない工学（Engineering）が24.3である⁽⁷⁾。この数字は、工学を専攻する学生5人のうち1人が女性であることを意味している。

一方、2006（平成18）年の日本の4年制大学学部における学生数は、女子学生数が40.4%を占め、男子学生数を100とすると女子は67.8である⁽⁸⁾。高専・短大は含まれていないので高等教育機関全般ではないが、インドの66とほとんど変わらない。同じく2006（平成18）年の専攻分野をみると、男子学生数100とした場合に100を超える専攻分野と100に満たない分野がある。100を超える分野、すなわち女子学生の方が多く専攻している分野は、人文科学、医学・歯学以外の保健、家政、教育、芸術である。その中で一番男女差があるのは家政で、男子100に対し、女子では965.4と男子の約10倍である。逆に、男子学生の方が多く専攻している分野は社会科学、理学、工学、農学、医学・歯学であり、一番女子が少ないのが工学である。男子を100とすると、女子は11.7である。これはインドで工学を専攻する女子の対男子比率24.3の半分以下である。

このようにデータを比較してみると、日本の大学学部レベルにおける専攻分野は、インドより男女の偏りが顕著である。インドでは、職業志向意識だけでなく学問専攻分野においても、日本より男女差が少ないと言える。

4) コンピューター・ITと女性

インド女性に関する一般的な記述を読む限り、戦前の日本の女性のような地位や一生が思い浮かぶ。その姿は、男性に伍して社会で働き活躍する女性像とはかけ離れている。しかし前述のように、小学生・高校生の将来の職業の希望、大学生の専攻分野についてインドと日本を比較すると、日本よりインドの方が男女差が少なく、特に、ITやコンピューター関連の職業や学問分野に関して、女性が積極的であることが分かった。この背景には、ロックウッド・スクールの女子生徒は10年くらい前までは教員希望が多かったという事実から、近年のIT産業の進展に伴い、女性の職業モデルとしてITやコンピューター関連の分野での女性の活躍が顕著になってきている現実があるのではないかと考えられる。特に都会では女性の職場が広がっている。実際、オールセント工科大学学生の就職は非常に好調で、就職において男女差別はないとの説明を受けた。このような現実がますます男女差を縮めているのであろう。

では、このような近年の女性の社会的躍進の要因は何なのであろうか。

オールセント工科大学で、コンピューターの作業は身体的な腕力や力を必要としないデスクワークであるので、男性と比べて女性が不利ということはないと聞いた。これは確かに重要な要因であると考えられる。しかし、コンピューターと聞いただけで毛嫌いをする女性ばかりであったなら、IT分野への女性の進出は進まなかったであろう。そう考えると、根本的な要因はITやコンピューターというものと女性の距離感が縮まったということではないかと推察される。

コンピューターに対する態度 (Computer Attitudes) とジェンダーについての興味深いインドの研究がある。Annamalai大学のVanathi Vembarが大学院生—経営学専攻の学生(男性142名, 女性40名)とコンピューター科学専攻の学生(男性20名, 女性25名)—を対象に、コンピューターを使うことの自信 (Confidence), 不安 (Anxiety), 楽しさ (Enjoyment) を測定し統計的に比較した調査である⁹⁾。対象者全体(男性122, 女性65名)の男女比較をしたところ差はなく、専攻別の比較では差が認められた。そこで、男女別に「自信」「不安」「楽しさ」について比較したところ、女性では「自信」「不安」「楽しさ」のいずれにおいても、専攻による差は認められなかった。一方、男性では、「自信」と「楽しさ」において差が認められ、コンピューター科学専攻の学生の方がコンピューターを使うことに自信があり、楽しんでいるという結果であった。つまり、専攻別で認められた差は男子学生の差によるものであり、女子学生はコンピューターを専攻していなくてもコンピューターを使うことに自信があり、楽しんでいるということである。

1997年に発表されたWhitelyの論文¹⁰⁾では、教師たちはコンピューター等のITにジェンダーステレオタイプな反応をしていたことを報告しているが、Vembarの上述の結果は2003年に発表されたShapka & Ferrariの論文 "Computer-Related Attitudes and Actions of Teacher Candidates"¹¹⁾の結果と一致していると述べている。すなわち高学歴の若者においては、ジェンダーステレオタイプはもはや過去のものとなってきているのである。

筆者は、コンピューターやITに女性が慣れ親しみ、ITに強い女性が多くいるというのが、日本にはないインドの強みであり、これが、インド女性の社会進出や活躍を可能にしている大きな一因であると推論する。

コンピューターやITが女性の躍進やエンパワメントに役立っている例は、都会ばかりではない。地方においてもしかりで、そのよい例は自助グループ (Self Help Group) のコンピューター活用に見られる。たとえば、インドで一番大きな女性銀行のSEWA銀行の例である。銀行のコンピューター化が、自助グループが村での経済活動を拡大するのを支援したというのである。つまり、村の女性たちが作る手工芸品をインターネット上に陳列

したところ人々の興味を引き、その結果、より高い値段で販売することができてビジネスが拡大したのである。その地域の女性4万人以上がその恩恵に浴していると報告されている¹²⁾。女性のための政策がどの程度計画され実施されてきたかの指標となっている政府の5カ年計画の11次計画(2007-2012)では、自助グループと地域に根ざした組織の強化を挙げており¹³⁾、今後はますます情報伝達技術の活用が進むであろうと予測される。

以上、本項では主にコンピューターやITと女性の関わりをみてきた。IT産業関連の職業では体力や腕力を必要としないため、性別は問題ではない。求められるのは、コンピューター操作やコンピューター関連の専門的知識であり、言わばコンピューターが女性を男性と対等にする「単なるツール」として役割を果たしていることが伺える。その前提には、「コンピューター・IT=理系=男性の分野」という固定観念やアレルギーを醸成しない教育が機能しているのではないかと考えられる。その結果、女性がIT分野に入り込むことによって女性自身がエンパワシ、女性の活躍がさらに次世代の女子に対しIT関連分野に興味づけを果たしていると言えよう。

さらにコンピューターを身近に感じさせる要因として、英語教育が果たす役割は大きいと思われる。インド訪問中にお世話になったコーディネーターの方に、イギリスの植民地支配の影響を尋ねた。一番大きなプラスの遺産は、英語で教育が行われるようになったことというお答えであった。全ての子どもが英語の高等教育を受けられる訳ではないが、日常的に英語を使用する人口は日本の比ではない。英語を使うことはキーボード操作をはじめ、コンピューターやインターネットへのアクセスを容易にする。英語での学校教育がITへのハードルを下げたことは間違いない。従って、女の子を学校へ来させるための女子優遇策による女子教育推進の意義は大きいと言えよう。

それから、女子教育に対する親の考えも決定的な要因であろう。サーマックス社会長のメーハー・パダムジーさん、ロックウッド・スクールの女子生徒たち、オールセント工科大学の副学長の全てに共通しているのが、古いジェンダー観に囚われない親の態度や方針である。彼女達は皆、親の理解と支援により、自分の能力を磨いて発揮し自分らしく生きる人生を手に入れている。

5) おわりに

平均的女性像を比べればインド女性は日本女性より過酷な一生を過ごすと言える。しかし、根強く残るカースト制度意識や地域差が複雑にからんで格差が多きなのがインドであり、本稿で焦点を当てた中流・上流階級においては必ずしもそうではない。本稿では、インドの児童・生徒の将来の希望、大学での専攻の手がかりにそれらを

日本と比較し、特にコンピューターやIT関連分野においてインドでは男女差がなくなっていること、それゆえにその分野への女性の進出が進み、それが女性のエンパワメントに大きく貢献していることを論じた。「コンピューター・IT = 男性の分野」と捉えられがちな日本に対し、インドの女子・女性が、なぜこれらの分野に積極的なのであろうかという疑問に、女子を重視した教育の他、英語での教育や親の態度・考え方が影響しているのではないかなどを要因を指摘した。

近年、インドではIT産業の進展により経済発展はめざましく、女性の社会的躍進もそれに連動している。中流・上流階級に属する女性の活躍を見ていると、彼女らの家庭には数人の家庭内使用人がいるので、日本の女性より社会で働きやすいのではないかと感じる。しかし、問題がないわけではない。家庭内使用人は減ってきており、信頼できる人ばかりとは限らないという。また、家庭内においては日本と同様に性別役割が続いており、家事・子育てにおいて女性への負担が大きい。そのため、かつての日本の共働き夫婦の多くがそうであったように、親との同居による子育ても多い。今後、核家族化が進展すれば家事・子育てはどうなるのであろうか。そして何よりも、産業全体の経済活動が停滞したときに、女性の社会進出は守られるのであろうか。企業の中での昇進に男女で差があるという話も聞いた。これらは今後、注視が求められる点である。

最後に、本稿から得られる研究課題を記しておきたい。日本では自然科学分野の女性科学者が少ないことが、近年問題視されている。大学での専攻者が少ないこと、女性を採用する受け入れ態勢が整備されていないことが直接的な原因であるが、根本を突きつめると「コンピューター・IT = 理系 = 男性の分野」と捉えられ、その枠組みが堅持されていることが大きな要因であろう。この性別に由来する枠組みが幼少期から刷り込まれ、壊れないのはなぜなのか、また壊していくためには何をどうすればよいのか。逆に、インドでそのような固定観念を抱かせない仕組みは、どのように構築されているのであろうか。これらの解明が今後の研究課題であると考えている。

注

- 1 何年に行われた調査であるか明記されていないが、この論文が収められている本と参考文献に挙げられている論文から、調査は2003年以降であると推察できる。

引用文献

- (1) Charities Aid Foundation, India, アジア女性交流・研究フォーラム『インドの女性』アジア女性シリーズNo.12, 財団法人アジア女性交流・研究フォーラム発行, 2007

- (2) メーハー・パダムジー, アジア女性経済人会議発言要旨, <http://www.pref.osaka.jp/kokusai/asia/woman/b1-1.html>, 2006
- (3) Rubin Z, Sloman J., & Watason K.S., *Psychology : Being Human*. New York, Harper and Row, 1985
- (4) 服部範子他, インドにおける女子教育及び女性のライフコース－デリー及びボパールでの調査（2007）より－, 兵庫教育大学研究紀要第32巻, pp. 53-65, 2008
- (5) ベネッセ教育研究開発センター, 第4回学習基本調査報告書『小学生版』, 71-74頁, 2007.3
- (6) ベネッセ教育研究開発センター, 第4回学習基本調査報告書『高校生版』, 90-91頁, 2007.3
- (7) Rameshwari Pandya & Varsha Psrikh, *Women Empowerment through Education*, in "Women in India," edited by Rameshwari Pandya, New Century Publications, New Delhi, pp.310-323, 2007
- (8) 男女共同参画白書平成19年版, 第6章教育・研究分野における男女共同参画, 95-102頁, 2007
- (9) Vanathi Vembar, *Gender-Learning Perspective of Computer Related Attitudes*, in "Women's Empowerment," edited by M. R. Biju, Mittal Publications, New Delhi, pp.161-166, 2006
- (10) Whitely, B.E., "Gender Differences in Computer-Related Attitudes and Behaviour: A Meta-Analysis," *Computers in Human Behaviour*, Vol.13, pp.1-22, 1997
- (11) Shapka, J. D., & Ferrari, M., "Computer-Related Attitudes and Actions of Teacher Candidates," *Computers in Human Behaviour*, Vol.19, pp.319-334, 2003
- (12) Mary Cherian, *Information and Communication Technology for Women Empowerment*, in "Women's Empowerment," edited by M. R. Biju, Mittal Publications, New Delhi, pp.167-184, 2006
- (13) V. S. Ganesamurthy, Editor's note on the Book, in "India: Economic Empowerment of Women," edited by V. S. Ganesamurthy, New Century Publications, New Delhi, pp.vii-ix, 2007

(黒川 衣代)

4. インドの人口問題とジェンダー

1) 世界的にみたインドの人口・教育

インドの人口は中国に続き世界で第二番目に多く、2001年国勢調査によると10億2874万人である⁽¹⁾。先進諸国では少子化が問題にされているが、南アジア諸国では人口の多いことが問題にされ、人口抑制が人口政策上

の主要課題となっている。

インドの平均寿命は表1に明らかなように、1950年代前半には40歳に達していなかったが、徐々に伸長し、2001年には女性は66.9歳、男性は63.9歳となっている。国連の人間開発指数が高位にある約30ヶ国では、2004年の平均寿命は70歳代後半から80歳を越えている⁽²⁾。インドの平均寿命はこのような世界的なデータよりも10歳以上も短い状況である。

また、インドでは平均寿命が2001年には女性は男性よりも3歳長い、女性の寿命が男性よりも長くなってきたのは1985年以後のことである。男女の平均寿命について、女性の寿命が男性よりも長いのは世界的にほとんど共通にみられる特徴である。ところが、インドなど南アジア地域では、世界的にみると例外的に女性の寿命の方が短いことが指摘されてきた。このような要因としては、高い乳幼児死亡率、そして、特に女児の死亡率の方が高いことと、出産年齢期にある女性の死亡率が高いこと、すなわち、高い妊産婦死亡率が指摘されている⁽³⁾。

次にインドにおける20世紀初めからの識字率の推移は表2の通りである。現在、就学率ではなく識字率を問題にしなければならない国は世界的にみると少数派である。

表1 インドにおける男女別平均寿命の推移

	1950-	1955-	1960-	1965-	1970-	1975-	1980-	1985-	2001
男子	39.4	43.5	46.2	48.7	51.2	53.3	55.6	57.8	63.9
女子	38.0	41.7	44.7	47.3	49.3	52.4	55.2	57.9	66.9

その識字率さえ低い状況が続いており、しかも、2001年に男性75.3%に対して女性は53.7%で、著しくジェンダー不平等な状況が続いている。

筆者は前巻において、インドで最近、女性のための教育や職業に関する政策が積極的に推進されていることを分担執筆した⁽⁴⁾。インドでの現地調査は都市部の豊かな階層や新しい取組みに焦点をおいた。

近年の女性優遇政策は、このような状況を改善する取組みの一面もあるが、他方では人口抑制政策の一面もある。すなわち、1994年の国連・人口に関するカイロ会議以後、途上国の人口問題を解決するためには、女性を教育しエンパワーすることが重要であると認識されているからである。

そこで本章ではインドの人口問題をジェンダーの視点から、インド全体の状況をふまえて、現地調査を実施したマディヤ・プラデーシュ州に焦点をおいて分析を試みる。

2) 北インドと南インドの概観

インドは国土面積でも巨大な国であり、地域差が大きい。州都ボパールのあるマディヤ・プラデーシュ州はインドの北部に位置し、インドの州のうちでも規模も人口も大きく、大半は農村部である。そこで、ここではインドを南北に分け、北インドに位置するマディヤ・プラデーシュ州の特徴を、南インドのケララ州と対比させ浮かび上がらせるように論じる。ケララ州は南インドを代表するのみでなく、インドの中では最も進んだ州のような位置づけがなされているからである⁽⁵⁾。

インド独立以前の人口や保健・医療について論じた齊藤修によると⁽⁶⁾、インドは人口学的にみると大きく南北に分けられ、古くから本質的に異なった傾向を示してきた。すなわち、北インドは南インドよりも平均寿命が短く、死亡率が高いが、とりわけ乳児死亡率の高い傾向が指摘されている。平均余命や乳児死亡率の男女差について南北の地域差が大きいことも指摘されている。すなわち、北では女子の乳児死亡率が高く、平均余命は短い、南インドではそれとは正反対の傾向を示してきたというのである。

脇村孝平は独立後のインドの人口・健康について論じているが、同じく南北の地域間格差の問題にふれている⁽⁷⁾。

インドの行政区分は図1の通りである。脇

注1 西川由比子 1994「インド及び周辺諸国の死亡水準の変化」
小林和正・大淵寛編 『生存と死亡の人口学』
(シリーズ・人口学研究 4) 大明堂 p.105
2 Office of the Registrar General & Census Commissioner, India, 2004
"Census of India"
<http://www.censusindia.gov.in/Census Data 2001/India at glance>

表2 インドにおける男女別識字率の推移 (%)
(国勢調査による)

	男子	女子
1901	9.83	0.60
1911	10.56	1.05
1921	12.21	1.81
1931	15.59	2.93
1941	24.90	7.30
1951	27.16	8.86
1961	40.40	15.34
1971	45.95	21.97
1981	56.50	29.85
1991	64.13	39.29
2001	75.30	53.70

注 Charities Aid Foundation, India アジア女性交流・研究フォーラム訳
『インドの女性』2007 p. 53 (2001年のデータを除く)
2001年のデータについては以下による。
Office of the Registrar General & Census Commissioner, India, 2004
"Census of India"
<http://www.censusindia.gov.in/Census Data 2001/India at glance>



山下博司 1997 『ヒンドゥー教とインド社会』 山川出版社
 図1 インドの行政区分（2005年現在）

村はマディヤ・プラデーシュ州のほかビハール州、ラージャスタン州、ウッタル・プラデーシュ州の4州を北インド、ケララ州ほかカルナータカ州、タミル・ナドゥ州の3州を南インドとしてカテゴリー化し、南北の2地域を平均したデータにより分析し比較検討している⁽⁸⁾。

それによると、平均余命（1993-97）について、北インドは57.8歳であるが、南インドは66.9歳で、北は南より10歳近くも短かった。乳児死亡率（1999）については、北インドは79.5であるが南インドは41.3で、北は南の約半分であるという。

このように南北で大きな差異が見出されることを明らかにした上で、南インドでも特に優れたデータを示すケ

ララ州の地域の特徴としては以下のように指摘されている。

1人当たりの所得水準はインドでも中位水準にあり、特に経済的に豊かな地域というわけではない。しかし、医療・公衆衛生政策については、キリスト教の影響により西洋医学が普及していることや、アーユルベータ医学が盛んであることのほか、教育や医療・保健関連のサービスが進んでいることが指摘されている⁽⁹⁾。

3) マディヤ・プラデーシュ州の人口・教育 ー南北の比較検討ー

以上をふまえた上で、ここでは、最近のインドの人口や教育の状況について、インド全体についてと、マディヤ・プラデーシュ州をインド全域やケララ州を中心とする南インドと比較検討して論じる。

南北の地域については、前述の脇村と同じく、北インドはマディヤ・プラデーシュ州など4州、南インドはケララ州など3州に限定する。

次にデータについては、前述の2001年の国勢調査データと、女性に関連深い最新データが収集されている『インドの女性』からピックアップする⁽¹⁰⁾。

分析データは3カテゴリーに分ける。

第一は人口学的なデータで、世帯規模、全人口の性比、さらに0-6歳人口の性比及び女児死亡率である。

第二は、人口学的データと関連深く、妊産婦死亡率を左右するデータで、18歳未満で結婚した女性の割合と、出産時に専門家の立会い比率である。

第三は、女性の教育状況について、女性の識字率と就学率である。

以上を一表にしたのが、表3である。

(1) インド全域の特徴

まずインド全域のデータを表3により検討した上で、マディヤの特徴が浮き彫りになるように論じる。

表3 インドの人口とジェンダー

	世帯規模 (人)	全人口の性 比女性 (男性1000対)		人口(0-6歳) の性比 女性 (男性1000対)	女児死亡率 (乳児1000対)	18歳未満で結婚 した女性割合(%) (25-49歳既婚)	専門家立会い 出産の比率 (%)	識字率(%) (7歳以上)			6-14歳女 児の就学 率(%)
		全体	女性					男性			
インド全域	5.3	933	927	74	65	43	64.8	53.7	75.3	74	
北インド											
○マディヤプラデーシュ州	5.5	919	932	97	79	30	63.7	50.3	76.1	71	
ウッタルプラデーシュ州	6.5	898	916	93	80	22	56.3	42.2	68.8	69	
ビハール州	6.0	919	942	67	84	24	47.0	33.1	59.7	54	
ラージャスタン州	6.1	921	909	84	82	36	60.4	43.9	75.7	63	
南インド											
○ケララ州	4.7	1058	960	13	27	95	90.9	87.7	94.2	97	
カルナータカ州	5.1	965	946	56	61	59	66.6	56.9	76.1	78	
タミルナドゥ州	4.3	987	942	58	42	84	73.5	64.4	82.4	89	
	1)	1)	1)	2)	2)	2)			1)	2)	

注 1) Office of the Registrar General, India, 2004 "Census of India 2001"
 2) Charities Aid Foundation, India アジア女性交流・研究フォーラム 2007
 『インドの女性』 アジア女性交流・研究フォーラム 1998-99のデータ

第一の人口学的なデータについて、インドでは一家族に子ども2人という政府キャンペーンがなされているが、世帯規模は5.3である。全人口の性比は男性1000に対して女性は933で少ないが、日本は2005年の国勢調査⁽¹¹⁾では男性1,000に対して女性は1050である。インドのように男性より女性の人口が少ない国は、世界的には例外的に少数である。さらに0-6歳人口の性比についてみると、男性1000に対して女性は927で、全人口の比率よりもさらに少ない。日本の0-4歳人口の性比(2005年国勢調査)は、男性1,000に対して954であった⁽¹¹⁾。

女兒の死亡率(乳児1000対)は74で、先進諸国の乳幼児死亡率のデータは一桁の数字にしか過ぎないことを考えると、いかに高い状況が続いているかが理解できる。このようにインドをはじめとする南アジア地域で女兒の死亡率が高いのも、世界的にみても異常なことであると指摘されている。すなわち、「大部分の国で女兒の乳児死亡率は男児のそれより低く、それは生物学的な女兒の優位性に起因する」⁽¹²⁾と考えられている。この地域は世界的にみても異常な「女兒の過剰死亡」地帯であり、出生後も「女兒養育放棄(daughter-neglect)」があると指摘されている⁽¹³⁾。

このように、インドは世界的規模でみても人口については全般的に課題の多い地域で、そして、このようなデータにジェンダー不平等は明白に表われている。

第二に人口学的なデータと関連深い女性の早婚割合と出産の際の専門家立会い比率についてみる。女性の寿命を伸ばし死亡率を低下させるためには、妊産婦死亡率を低下させることが重要な課題とされてきた。そのためには女性のより晩婚化をすすめる、出産の際、専門家による立会いが重要であると指摘されている。しかし、25-49歳の既婚女性のうち18歳未満で結婚した女性割合は65%であり、専門家立会い出産の比率は43%に過ぎない。

第三に女性の教育状況についてみると、識字率は全体では64.8%であるが、女性は53.7%、男性は75.3%で、女性は半数にすぎない状況である。女兒(6-14歳)の就学率は74%で低いが、成人女性の識字率があまりに低い状況からみると、近年、それでも就学率が上昇している。これは若年層に女子教育が推進されているためと推測される。

(2) マディヤ・ブラデーシュ州の特徴

—ケラーラ州との比較—

以上、インド全域のデータを概観した上で、マディヤ・ブラデーシュ州(以下、マディヤと略記)など北インドとケラーラ州(以下、ケラーラと略記)など南インドとを比較検討する。まず全体的な傾向を要約すると、いずれのデータについても、インド全域のデータよりも、北インドは悪く、南インドは良いデータが並んでいる。

次にマディヤを中心とする北インドについて、ケラーラを中心とする南インドとを比較検討し、その特徴を浮き彫りにする。

第一の人口学的なデータについてみると、世帯規模について北インドはインド全域より多く、全人口の性比はマディヤでは男性1000に対して女性は919で少ない。インドではケラーラのみ女性は1058で男性よりも多い。0-6歳人口の性比を検討すると、マディヤは932でインド全域よりも高いが、北インドはインド全域よりも低く、南インドのケラーラは960である。女兒の死亡率(乳児1000対)について、マディヤは97で北インドの中でも高いが、ケラーラでは13に過ぎない。

第二に25-49歳既婚女性のうち18歳未満で結婚した女性割合は、マディヤなど北インドは約8割に及ぶ。専門家立会い出産の比率はマディヤは30%に過ぎない。それに対して、ケラーラでは女性の結婚年齢が遅く、大半の出産は専門家立会いである。

第三に女性の教育状況についてみると、マディヤは北インドの中では識字率・就学率ともに高い方である(写真8)。ケラーラの識字率は90.9%、女兒(6-14歳)の就学率も97%で、インド全域の中でも、女性への教育の普及が際立って高い。

以上、マディヤなど北インドを、ケラーラなど南インドと比較してみた。

マディヤなど北インドは人口的にみると、男性よりも女性の人口が少なく、多産多死の傾向がみられ、女性の出産に関連した死亡が多い状況が続いている。特に女兒の死亡率が高いことは、北が女性差別的な社会状況であることを、具体的なデータで表しているといえよう。

実際、北インドの女性は早婚傾向があり出産数が多いにも関わらず、専門家による立会い出産は少ない。教育についても、北は全体的に遅れているが、教育におけるジェンダー格差も大きい。

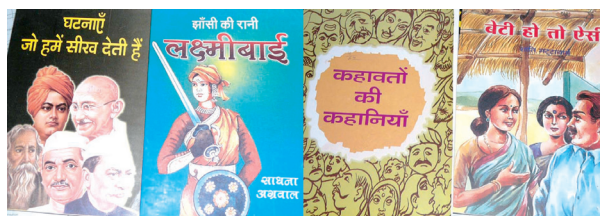


写真8
教科書の表紙(上段)と公立学校の生徒が描いた絵画(下段)
(ボパール 2007)

教育については、マディヤ・プラデーシュ州は北インドでは高い方である。現地調査の際、教育関係者の方々が、ケララを努力目標のようにして頑張っておられたのが、このようなデータをもみても了解できる。

4) おわりに—社会的要因など

本章では、インドの人口問題を教育やジェンダーと関連づけて考察した。

インドの人口的なデータは世界の中に位置づけると大変、低いレベルにある。さらに人口のデータには顕著なジェンダー格差がみられる。

一般的に途上国では、男性が主たる労働力で経済的な生活が男性中心であることや、老後生活の安定や生活保障のために男児選好がみられると指摘されている。インドでは極端な男児選好や厳しい女性蔑視・差別が指摘されている。人口データを見ると、女性の寿命や生死にさえ社会的な女性差別が強い影響を及ぼしている。

インドを南北に分けて比較検討すると、調査地であった北インドは南インドよりも全体的に人口データや教育状況が劣っている。南インドでは古くから保健・医療制度や教育制度などが発達していることがその背景にあり、人口問題は貧困と相互に関連するといった単純なものではない。

また、北インドでは南よりも人口についてかなりジェンダー不平等がみられるが、前述の斎藤は独立以前のインドについて論じた際、その背景について、「北インドでは、現在でも男児選好が強く、女性の労働力率が低いのにたいして、南インドでは女兒への差別は少なく、女性が生産労働に参加する度合いは高い。女性の自律性は南で高く、北で低い」⁽¹⁴⁾と指摘している。

北インドには「パルダ (purdah)」と呼ばれる女性の社会的隔離が浸透していたが、インド独立後、この問題が論議され抑制されたと聞いた。顔や姿をベールで隠している女性は見かけなかったが、女性は家庭にいるのが良いとする意識は、上流階層であるほど根強くあると聞いた。

それに対して、南インドでは独立以前から海洋に面した地理的な条件により、欧米のキリスト教などの影響を受けてきた。また、ケララ州のカーストの一つであるナヤールでは、母系制の家族制度があったことは知られている⁽¹⁵⁾。南インドではこのような伝統・慣習が今も残っており、北よりも女性が働き手で、女性の社会的な地位が高い傾向があると推測される。

近年、インドは「IT大国」といわれ経済は急成長しつつある。このような社会状況下において、南アジア女性のエンパワーメントを支援する国際的な取り組みや、国内における最近の女子教育や女性の職業進出・社会参加を積極的に推進する政策が、インドにどの程度、どのよう

なところに、どのような影響を及ぼしていくのか、インドの今後には注目される。

注

- (1) インドの国勢調査は10年毎に実施されており、最新データは2001年実施である。Office of the Registrar General, India, 2004 "Census of India 2001, Population Profiles". http://www.censusindia.gov.in/Census_Data_2001/India_at_glance
- (2) 国連開発計画 (UNDP) 2007 『人間開発報告書 2006』 国際協力出版会 古今書院 pp.333-336
- (3) 西川由比子 2004 「インドおよび周辺諸国の死亡水準の変化」 小林和正・大淵寛編 『生存と死亡の人口学』(シリーズ・人口学研究4) 大明堂 (pp.98-119) p.107
- (4) 服部他 2008 前掲 pp.54-59
- (5) インドの人々が私たちに説明して下さる際に、「ケララ州では・・・」「ケララ州でさえも・・・」というようにケララ州と比較し度々、語られた。インドの女子教育や女性のエンパワーメント関連の社会的な法制・施策において、ケララ州での取り組みは目指すべき理想像や努力目標であると認識されているように思われた。
- (6) 斎藤修 2002 「飢饉と死亡と人口変動」 柳澤悠編 現代南アジア④ 開発と環境 東京大学出版会 第7章 pp.165-186
- (7) 脇村孝平 2002 「開発と疾病・医療——独立後のインドの健康と医療・公衆衛生」 柳澤悠編 前掲書 第8章の1 pp.187-202
- (8) 脇村 前掲 p.194
- (9) 脇村 前掲 pp.197-199
- (10) Charities Aid Foundation, India アジア女性交流・研究フォーラム訳 2007 『インドの女性』 アジア女性交流・研究フォーラム
- (11) 「年齢 (5 歳階級), 男女別推計人口」 平成19年3月1日 (概算値) <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat>
- (12) 高濱美保子 2004 「途上国における死亡の男女格差」 小林和正・大淵寛編 『生存と死亡の人口学』(シリーズ・人口学研究4) 大明堂 (pp.43-66) p.46
- (13) 阿藤誠 2002 「ジェンダー的視点からみた人口問題」 阿藤誠・早瀬保子編 『ジェンダーと人口問題』 大明堂 pp.1-20
- (14) 斎藤 前掲 p.172-174
- (15) 川島耕司 2003 「ケララのナーヤルと母系制—近代化との摩擦—」 重松信司・三田昌彦編 2003 『インドを知るための50章』 明石書店 pp.

(服部 範子)

5. まとめ

本稿では、インド調査の結果を、就学前教育、女性の教育とコンピューター・ITとの関係、及び、人口問題とジェンダーの3側面について考察した。

まず、本稿で論じたインドの就学前教育については、以下のようにまとめられる。

1. 10年間インドに滞在していたモンテッソーリの影響で、幼児の発達を促すために、自発的活動を促す環境の中で遊びを充実するという基本的な内容が踏襲されている。
2. モンテッソーリの影響は、ガンディーのプレ・ベシック・スクールの基本的な考え方にも大きく影響している。
3. モンテッソーリの考え方は、今回見学したクレシェ（保育所）にもみられ、独自の質の高い保育を実施していた。
4. 現在のインドでの就学前教育は、保育に加えて、基礎的な読み・書き・計算を実施する「幼児教育統合プログラム」(ICDS)が各地の機関で採用され、最も普及している。

次に、女性の教育をコンピューターやITとの関係で考察した結果は以下のようにまとめられる。

1. インドの児童・生徒が将来につきたい職業、大学生の学問専攻分野を日本と比べると男女であまり差がなく、女性がITやコンピューター関連の職業や学問に積極的である。
2. 1.の理由として、「コンピューター＝理系＝男性の分野」という固定観念が強固でないこと、女子を優遇した教育、英語での教育、親の女子教育に対する考え方等が女性の進路に影響していると考えられる。
3. 女性がITやコンピューター分野に入り込み、コンピューターを活用することで女性自身がエンパワーし、そのような女性の活躍がさらに次世代の女性の興味づけを果たしていると考えられる。

インドの人口とジェンダーについては、以下のようにまとめられる。

1. インドの人口データは平均寿命や全人口の性比、識字率など、世界的にみると、大変、低いレベルにある。しかも、ジェンダー差が著しく、女性の健康状態は非常に深刻な状況にある。
2. インドを地域的に南北に分けて検討すると、北インドは南インドよりも人口・教育状況が全体的にかなり劣っている。

3. マディヤ・プラデーシュ州を含めた北インドは多産多死の傾向があり、そして、女子の死亡率の高さや女性の人口が少ないなど、人口データには極端なジェンダー不平等が見られる。

4. 教育状況についても、北インドは南インドよりも遅れているが、特に女性の識字率や就学率は遅れている。マディヤ・プラデーシュ州は、北インドの中では女性の識字率や就学率は高い方である。

付記

本調査研究は、「南アジアにおける女子教育及び女性のライフコースに関する総合的研究」(科学研究費・基盤研究(B)海外学術調査 課題番号 19402041 研究代表者 服部範子)の一部として実施した。インドでの現地調査を実施するにあたり、インド日本語センターの名須川典子氏(Ms. Noriko Nasukawa)とアニル・クマル氏(Mr. Anil Kumar)ほか、多くの方々にお世話になりました。ここにこれを記し、厚く御礼申し上げます。